様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　22　年　4　月　22　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19520004
研究課題名（和文）日本倫理思想史における情念の総合的研究
～『源氏物語』を機軸として～
研究課題名（英文）Overall research on human passions in Japanese ethical thoughts: centering on Genjimonogatari

研究代表者　木村　純二（KIMURA JUNJI）
弘前大学・人文学部・准教授
研究者番号：00345240

研究代表者の専門分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学
キーワード：日本倫理学、思想史、日本倫理思想史、情念、源氏物語、恋、和辻哲郎

１．研究計画の概要

本研究は、日本の倫理思想史における情念の問題を、神話・物語、仏教、儒教、国学、近代思想等、さまざまな角度から総合的に捉え返し、情念の把握の歴史的変遷およびその現代的意義について考察することを目的とする。その際、『源氏物語』を一つの機軸に据え、上記の各領域における『源氏物語』論ないし『源氏物語』との影響関係を研究対象として取り上げることで、各領域の研究を並列するにとどまらず、有機的な連関をもった研究となることを目指している。

また同時に、研究がそのように文芸作品をも含めた多くの思想潮流にまたがらざるを得ない日本思想研究の方法論についても、従来の研究を総括しつつ、考察を試みる計画である。

研究は、仏教・儒教・国学等の領域をそれぞれ専門とする日本倫理思想史研究者が協同して遂行にあたり、代表者１名のほか、連携研究者２名、研究協力者８名の計 11 名が研究に参加する。

２．研究の進捗状況

本研究では、研究代表者・連携研究者・研究協力者が、仏教・儒教・国学・近代思想等の専門的知見を持ち寄りつつ、『源氏物語』を協同で読み進め、検討している。具体的には、年２回の定例研究会において、持ち回りで研究発表を務め、全員で協議検討する形で研究が進められており、研究３年度が終了する平成 22 年３月末時点で、光源氏の物語の終盤近くである「柏木」巻まで読み進められている。これは、ほぼ計画通りの順調なペースと言える。これまでの議論では、『源氏物語』の解釈を通じ、恋や悲しみ・恨みといった情念と人倫性との関係、あるいは神話的世界観と仏教思想との相克等々、様々な思想的課題が提出され、検討されており、その成果は各自が執筆する論文においてまとめられ、示されることになっている。

また、課題申請時の計画では、最終年度に各自の論文を掲載した成果報告書を作成し提出する予定であったが、科学研究費の制度が変わり、その提出がなくなったため、成果の発表場所として、学術雑誌『季刊日本思想史』（ぺりかん社）において、『源氏物語』の特集号を組むことが、研究代表者と担当編集者との打ち合わせの結果、決まっている。同誌の既刊分の第 75 号までに『源氏物語』の特集号はなく、日本思想史研究においても、新たな知見を切り拓く研究として、意義深い試みになることが予想される。

その他、日本倫理思想史研究の方法論については、特に和辻哲郎の『日本倫理思想史』を取り上げ、倫理学と倫理思想史との関わりなどが再検討されており、その成果は平成 22 年度中に発表できる見通しである。

３．現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

（理由）

申請当初の研究計画では、『源氏物語』を機軸として、仏教・儒教・国学・近代思想等の各領域における情念の問題を検討し、研究代表者・連携研究者・研究協力者の各自がそ

の成果を論文として執筆して、成果報告書にまとめることになっていた。各自の論文の執筆については、充分に目途が立っており、「おおむね順調に進展している」と言うべきであるが、それに加え、研究成果の発表場所として、日本思想史研究の学術雑誌として権威ある『季刊日本思想史』誌上で特集を組むことがすでに決まっている。これにより、当初の計画に比べ、研究成果の社会的還元という観点において、格段の進展を期待することができるものとなった。特に、「２．研究の進捗状況」に記したように、長い歴史のある同誌においても、『源氏物語』の特集号はなく、思想的問題として『源氏物語』を論じる本研究の学術的意義は大きいものと言える。

また、日本倫理思想史の方法に関する研究として、和辻哲郎の『日本倫理思想史』に関する研究を、平成 22 年度中に発表できる見通しが立っている。この方法論に関して、当初の計画は問題の発見と整理を課題とするものであり、研究期間内に成果を発表できることは、計画以上の充分な進展として特筆することができる。

４．今後の研究の推進方策

研究最終年度となる平成 22 年の 9 月ごろまでに、研究代表者・連携研究者・研究協力者が協同で『源氏物語』を読み進める研究会を終え、各自が専門的知見から論文の執筆に取り掛かる。『季刊日本思想史』の特集号の刊行が、他の企画との関係上、平成 23 年の初夏ごろとなる予定なので、平成 22 年度末までに、各自が論文の初稿を書き終え、相互に協議検討を加え、それを踏まえた完成原稿を研究成果として同誌に掲載する計画である。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①木村純二、「戦時期の折口学」、『人文社会論叢』人文社会篇第 20 号、p. 19-p. 42、2008 年、査読無

②木村純二、「隠遁と老い」、『倫理学年報』第 57 集、p. 35-p. 48、2008 年、査読有

〔学会発表〕（計１件）

①木村純二、「隠遁と老い」、日本倫理学会、2007 年 10 月 14 日、新潟大学

〔図書〕（計３件）

①吉田真樹、講談社、『平田篤胤－霊魂のゆくえ』、2009 年、275 頁

②木村純二、講談社、『折口信夫－いきどほる心』、2008 年、278 頁

③藤村（岡田）安芸子、講談社、『石原莞爾－愛と最終戦争』、2007 年、230 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕